

古生物学界の現代史と標本資料

東京医科歯科大学教養部

矢島道子

化石を研究する古生物学は、日本では、1877年、東京大学の地質学教室創立とともに始まった。しかしながら、化石は地質時代の決定や堆積環境の推定のための道具であり、化石そのものを進化の観点から研究することは、1970年代以降である。化石を生物として見ていこうと **paleobiology** として1980年代に確立した。日本では進化古生物学と訳されている。

進化古生物学は、欧米の学問を移入したというよりも、東京大学の花井哲郎(1924-2007)や速水格(1934-)らが模索して形成したところがある。花井は節足動物・甲殻類の介形虫を材料にした。化石介形虫の研究は1920年代石油地質学の一端として勃興したが、日本では、石油探査の手段としての化石介形虫の研究の要請はなかった。介形虫の化石は雌雄がはっきりわかり、また脱皮するなど生物学的形質を多く有するので、進化古生物学の材料として好適と考えた。

進化古生物学を支える考え方として、生物の進化を最上とし、生物学より早く1970年代に総合説を導入し、自然史の復権をめざし、博物館に模式標本登録を義務付け、**Typology** から脱却し、進化古生物学の形成には、さまざまな意識改革、科学哲学の導入がともなっていた。

1960年代に国際動物命名規約が確立し、日本でいち早く模式標本の登録を導入したのは、東京大学総合研究博物館である。当該博物館では、標本と研究論文とラベルが一体となるようにして標本管理がなされている。

参考文献

矢部長克、井尻正二、1964、対談 日本の地質学と古生物学、科学(岩波書店)、34巻、1号、p.584-590.

矢島道子、日本古生物学会創立75周年記念年表、2010、化石、88号、35-38ページ

花井哲郎、2006、カイミジンコから聞いたこと、どうぶつ社